

## 第3章 音楽

### 歌手の健康管理

歌手は声が命です。声が出なければ勝負になりません。みんな体調管理、特に風邪には注意をしています。

#### 「松崎しげる」の健康管理

昭和五十二年（一九七七年）の大晦日、第二十八回『NHK 紅白歌合戦』の時間が近づいていた。NHKのアナウンサーが控室に入る歌手にインタビューをしていた。そこに歌手の松崎しげるさんがやって来た。松崎さんは、「よせ、撮すな、やめろ」と言つて手でカメラをさえぎつた。松崎さんは、マスクをしていた。それをテレビに撮されなくなつたのです。すぐ、かけていたマスクを外した。一瞬の出来事だった。

松崎さんは『愛のメモリー』（作詞…たかたかし 作曲…馬飼野康二）を歌い終わると、平然

とステージを去った。この年、『愛のメモリー』は大ヒットし数々の賞に輝いた。

平成二十七年（二〇一五年）六月二十九日（月）、NHK『スタジオパークから こんにちは』で、六十五歳になった松崎さんにアナウンサーが質問をした。

「あのような迫力のある歌声を保つには、どのような発声練習をしているのですか」「発声練習は特にしていません。夜、酒を飲んでも、翌日ガンガン歌っちゃいますね。この声に生んでくれた親に感謝ですね」。私は、「やっぱりね」と思った。

### 「砂原美智子」の健康管理

オペラ歌手の砂原美智子さんは引退を心待ちにしていた。いつも喉の調子を気にする毎日だったからです。「普通の人のような生活をしたい」と願っていた。少し外に行くにも、カーディガンを一枚羽織るといふ神経の使いようだった。何ヶ月、何年先も、スケジュールはいつぱいで、風邪をひいたら大変です。引退しても大学の仕事があった。普通の人のような生活ができるようになった時、突然、昭和六十二年八月二十七日、心筋梗塞のため亡くなってしまった。享年六十四歳。

◆声楽家の砂原美智子は、大正十二年二月十九日、広島県呉市で生まれました。東京音楽学校（現・東京芸術大学音楽学部）本科声楽科卒業。終戦直後、藤原歌劇団からデビューしオペラ歌手（ソプラノ）として世界的に活躍、イスラエルのテルアビブ国立歌劇場の永久専属歌手に選ばれた。戦後の藤原歌劇団を支えた大プリマドンナです。美貌と日本人としては優れた歌唱力で、一世を風靡しました。第一線を退くと、

昭和音楽短期大学教授（一九六九年～一九八四年）、昭和音楽大学教授（一九八四年～一九八七年）、武蔵野音楽大学非常勤講師、東京声専音楽学校講師などを歴任、後進の指導に当たった。

### 「五十嵐喜芳」の健康管理

小田原市中央公民館（現・生涯学習センターけやき）でのコンサートは、娘のソプラノ歌手・五十嵐麻利江さんと一緒でした。五十嵐喜芳さんは、すでに高齢で声が出なくなっていました。美しい麻利江さんなしではコンサートができない状態でした。

しかし、オペラ歌手・五十嵐喜芳（テノール）の人氣は絶大で、ホールは満席でした。歌の合間にお話の時間がありました。印象に残っている話があります。

「ノドの状態は、いつも気にしています。たとえば、コンサート会場に行く時、タクシーを呼びますが、『風邪をひいていない運転手さんをお願いします』と言います。風邪をひいている運転手さんが来てしまった時は、ことわりますね。あんなに狭い個室の中で咳をゲンゲンされたら、風邪がうつらない方がおかしい」「それは、パパ、失礼よ」「失礼は承知だが、風邪をひいて歌えない事にでもなったら大変ですよ」「そうね」。

観客は常にベストを望んでいる。ほとんどの場合、客にとつてただ一回のコンサートになる。客の評価は厳しい。だから歌手は体調管理に涙ぐましい努力をしている。

◆五十嵐喜芳は、兵庫県神戸市出身。東京藝術大学卒業。在学中に第二十四回「NHK・毎日音楽コンクール（現・日本音楽コンクール）・声楽の部で特別賞を受賞。その後、中川牧三、四谷文子らに師事。一九六六年、

カルメンのドン・ホセ役で舞台デビューをした。

一九八五年から一九九九年六月まで、藤原歌劇団総監督（第三代）。一九九九年から二〇〇三年まで、新国立劇場オペラ芸術監督（第二代）。二〇〇〇年に昭和音楽大学（二〇〇七年まで）、同短期大学部（二〇〇九年まで）の学長に就任。二〇一一年九月二十三日、急性心筋梗塞のため東京都大田区の自宅で亡くなりました。享年八十三歳。

### 「由紀さおり」の健康管理

CD『PINK MARTINI & SAORI YUKI 1969』を買って聴いた。今、アメリカ・カナダ・イギリスなど世界各国で、音楽チャートのトップを飾る日本語の歌のCD。由紀さおりが、アメリカのジャズオーケストラ「ピンク・マルティニーニ」と共演したアルバムです。

一九六九年に流行った歌、『夜明けのスキヤット』『トルルル……愛し合うその時に この世はとまるの』、『ブルー・ライト・ヨコハマ』『♪待ちの灯りが とてもきれいな ヨコハマ』、『パフ』『♪パフ 魔法の竜が』、『夕月』『♪おしえてほしいの 涙のわけを』など十二曲が入っている。このCDについて、平成二十四年二月二十一日、NHK『クローズアップ現代』で取り上げた。「日本語で歌った曲が、日本語を知らない海外の人々に受け入れられたのは、なぜか」「これまで、由紀さおりが童謡や唱歌などを歌い続けることで培ってきた日本語の歌には、母音の使い方・イントネーション・発声方法など、世界でも稀に見る独特の美しさがある。それが見直されている」とし、番組では専門家による様々なアプローチで由紀さおりの日本語の歌声を分析した。

しかしCDを聴くと、「日本語の響きと日本語の繊細な世界」などという大げさな物ではない。普通のCDです。世界中の人々の心をとらえたのは、由紀さおりの声がすばらしいからです。美しい声です。由紀さおりは、日本を代表する歌手として世界に誇ることができます。

由紀さおり・安田祥子姉妹が神奈川県松田町民文化センターに来た時、母の妹と一緒に聴きに行ったことがあった。母の妹とコンサートに行ったのは、これが最初で最後となった。私を育ててくれたお礼となった。私は父と母が小学校の教員だったので、この人にあずけられて育った。会場は満員だった。最初に「二時間休憩なしで行きます。立ち歩かないようにお願いします」というアナウンスがあった。超満員で、これでは身動きが取れない。

第一部は、野口雨情と中山晋平に扮して寸劇を交えての童謡メドレーで『しゃぼん玉』『あの町この町』などが歌われた。寸劇の意味が理解できなかったため、聴衆には全く受けなかった。特に、野口雨情の「ありがたいでやんす」「あれまあ、そうでやんすか」「そうだっぺ」「そうだべさ」「んだ、んだ」などと言う方言が神奈川県足柄地区の人々には理解不能だった。「何をやっているのかしら」「何の事かしら」で終わった。さらに歌は、一番だけのメドレーでは迫力を欠き、童謡や唱歌の懐かしさや楽しさが半減した。

第二部は、美空ひばりの歌を中心に流行歌を歌った。聴衆へのサービスだったのでしよう。美空ひばりの歌は、ひばり独自のものがあり、由紀さおりが歌っても、ましてオペラの発声を学んだ安田祥子が歌っても、ひとつも感銘を受けなかった。私も、なぜ由紀さおりが美空ひばりの曲

を歌うのが理解できなかった。帰りに母の妹が「小百合ちゃんに連れて来てもらって、いいものが見れた」と喜んでいたので、よかったと思った。

私たちは、前列の左側で見ていた。由紀さおりは、右側のカーテン裏にお皿の上に乗ったコップを用意していた。コップには水がナミナミと注がれていた。一曲歌い終わる毎にその水を口に含んだ。水を飲むというより、唇をコップにつけて舐める感じだった。熱くなった喉を冷やしていた。

童謡の会を主宰している私も、コップに水を入れて、時々それを飲みながら歌ったり話したりしている。熱くなった喉を冷やすためだ。私は、コップの水をグッと飲む。顔を上げてグッと飲むと、むせる危険がある。

幼稚園の講演でもコップに水を入れて、それを飲みながら園児に歌を指導していた。すると園児が飲みたがった。全員が「何を飲んでいるのかな」「僕たちも飲みたいな」という顔だった。そして『ぼくのミックスジュース』（作詞：五味太郎 作曲：渋谷毅）を歌った。「♪あさは ミックスジュース ミックスジュース ミックスジュース こいつをググッと のみほせば きょうは いいこと あるかもね」。ググッとので、ジュースを飲む真似をさせた。園児は大喜びだった。私もコップの水をググッと飲みほした。

## どの子も育つか

ある家から「どんだけエ」と言う叫び声が聞こえた。続いて「子どもは育て方ひとつよね」と言うおばあさんの大声が響いた。毎日のように繰り返される、この家の娘や、おじいさんとの喧嘩を聞いている私は、驚いた。

私も含めて、このおばあさんの世代は、ヴァイオリンの指導者・鈴木鎮一の『キラキラ星』から始まる「スズキ・メソード」の大流行の時に小学生だった。親はこぞって自分の子どもにヴァイオリンを買い与えて練習させた。遊びの中にヴァイオリンがあった。

それから二十年後、有名になった鈴木鎮一は、「どの子も育つ、育て方ひとつ」と言い、世界中で講演し、本を出版した。当時の教育ママはこぞって本を買った。みんなが本を読み、自分の子どもの才能教育に全身全霊で取り組んだ。しかし、これには続きがあつて、鈴木鎮一は「人は環境の子なり」とも言っている。近所の家のおばあさんは、この「人は環境の子なり」の方が理解できていない。怒鳴り合いの喧嘩をする環境が、孫にいいわけがない。

鈴木鎮一の門下生の小林武史さん、二歳年下の弟の小林健次さん、豊田耕児さん、その他一時期世界で活躍していた有名ヴァイオリニストは、全て鈴木鎮一が育てたといっている。

家での練習は、小林家の場合は、父親が付きっ切りで指導し、鈴木先生の家でのレッスンには、いつも両親が付き添って行った。豊田耕児家の場合も、母親も父親も熱心で、家での練習も鈴木先生の家でのレッスンにも親が同行している。そうした環境の中で、長い時間かかって、たった

一人のヴァイオリニストが、ようやく誕生する。気が遠くなる話だ。

◆小林武史は、一九三二年、スマトラ島生まれ。鈴木鎮一に師事。一九四九年、毎日音楽コンクール一位。東京交響楽団、チェコ国立ブルノ・フィルハーモニー、オーストリア・リンツ州立ブルックナー交響楽団、読売日本交響楽団、各オーケストラのコンサートマスターを歴任。国際交流基金派遣は十回におよぶ。文化庁芸術祭賞。大賞各受賞。「かながわ音楽コンクール」ヴァイオリン部門審査委員長。横浜在住。

◆豊田耕児は、一九三三年生まれ。三歳から鈴木鎮一の門下生。パリ国立高等音楽院を卒業。ベルリン放送交響楽団コンサートマスター、ベルリン芸術大学教授を歴任。国際スズキ・メソード音楽院校長を務める。

「スズキ・メソード」の根幹である親と教師と生徒のトライアングルの大切さは、一般の親には理解しがたい。普通は、小学校高学年で、まず親が挫折し、続いて子どもも挫折する。成功者は、親と教師の粘り勝ちといった所だろう。鈴木鎮一は「どの子も育つ」と言い、どの子にも才能があるという前提だが、結果としては才能のない子でも親と鈴木鎮一が育てれば優れたヴァイオリニストが誕生する理屈になってしまった。ヴァイオリニストにふさわしい才能のある子どもが、それほど沢山いるわけではない。

全世界に普及した「スズキ・メソード」は、ヴァイオリンだけでなくピアノにも応用しようとした。ヴァイオリンの場合は、聴いた音を自分で作って弾く。これは簡単なようであるが、第一、自分で音を作るのは、理屈のようにはいかない。

ピアノの場合は両手で弾く。聴いた音を弾くのはヴァイオリンより、はるかに難しい。右手を



弾いて聴かせ、左手を弾いて聴かせ、両手を聴かせる。親や教師が付いていないとできない。根気よく指導に当たらないといけない。砂場で遊んでいる時もテープレコーダーを入れたリユックを背負わせ、吹き込んだ演奏を聴かせる。普通の人には、できるわけがない。この練習は異常だ。途中で挫折した親と子は、どうなっただろうか。当然、音楽嫌いになる。あれほど盛んだったヴァイオリンやピアノが今、どこの家でも眠っている。才能教育の欠陥は、ここにある。天才を育てるためだけに教育を行った結果、音楽を楽しむ方が欠落し、有名になれなかった者が、趣味で音楽を楽しむという方向に行く事は無い。仮に音楽大学を卒業できても、演奏家にはなれない。気位が高くなるだけで、つぶしがきかない。

◆鈴木鎮一は、日本で初めてヴァイオリンの製作（スズキ・ヴァイオリン）を始めた鈴木政吉の次男として一八九八年、愛知県名古屋市に生まれ、地元の商業高校を卒業した。ヴァイオリン工場を手伝っている時に体を壊し、転地療養先の静岡・興津で北海道の実業家の柳田一郎の知遇を得て、徳川義親侯爵を紹介された。徳川侯爵の世界一周旅行の一員として欧州に渡り、ベルリンで人気の高かったヴァイオリニスト、カール・クリングラウ唯一の内弟子になった。ドイツ人の妻を得て帰国。「どの子も育つ、育て方ひとつ」「人は環境の子なり」という信念は次第に浸透。才能教育研究会として具体化した。その「スズキ・メソッド」は、日本はもちろん全世界に普及し、俳句やカルタの「記憶力」の面でも話題になった。平成十年（一九九八年）一月、九十九歳で亡くなった。

## いじめ

弱い物が、いじめられる。

### 疎開そかいでのいじめ

神奈川新聞の『わが人生』の著者・小林武史さんは、長野県の野尻湖へ疎開した日の事を書いている。

「冷たい仕打ちに遭った」「田植えから稲刈りまで手伝えば米一俵くるといのにだまされて働いた。米一粒もらえなかった」「目の前のトウモロコシ畑の持ち主から今日は何本盗まれた、よそ者がよく盗むと嫌みを言われた」「父の服や母の着物、ありとあらゆるものをだまされて持って行かれてしまった」「母子三人の疎開者という弱い立場の一家は隙だらけ、だますのは簡単な事だったのかもしれない。しかし、あんなに悔しい思いをした事はありません」「疎開で、野尻の子どもたちが私たちの事を、東京っ子はスパイだと言い、物をぶつけ、悪口を浴びせる日々が続きました」「学校では先生までが冷たい目で見て炭焼きのための薪を背負って、みんなより多く山へ登らされました。疎開者が、なぜこんなに憎たらしいのか、私には理解できません」と。これを読んだ私は、指揮者の小澤征爾さんの事を思った。

小澤征爾さんは、平成二十七年（二〇一五年）一月、現在七十九歳。食道ガンの手術の後、休養していましたが、復帰して『セイジ・オザワ 松本フェスティバル』総監督として活躍されて

います。

昭和二十二年（一九四七年）四月、神奈川県足柄上郡金田村金手（現・大井町金手）に転居し、金田小学校六年に転入した。丸刈りの記念写真があります。とても神経質で、細かい感じですが、同級生の子どもたちのほとんどは農家の子で、たまに父親が国鉄に勤めていたりするのは珍しい事でした。

長兄・克巳と次兄・俊夫が参加していた混声合唱団「シグナス」（現在も小田原市にある）の指揮者・石黒先生の夫人にピアノを教わった。

小澤征爾著『おわらない音楽 私の履歴書』（日本経済新聞出版社）には次のように書いてあります。

……戦後、おやじは歯医者に戻ればいいものを、長いことやっていないからもう忘れたと言って、商売を始めてはことごとく失敗した。僕が小学校六年生の時にはミシン製造の会社を始めると言うので、立川の家を売り払い、神奈川県足柄上郡金田村（現・大井町）へ移る。小田原の近くだ。わらぶき屋根の古い農家に住み、おふくろが慣れない百姓仕事で米を作って育ち盛りの四人の息子を食わせた。

中学に入学する段になって、慣れない農村の学校よりは私学の方が良からうということになった。家から二時間半もかかったが、おふくろが成城学園に決めた。入学は昭和二十三年（一九四八年）四月、ピアノの豊増昇<sup>トヨゾノノボ</sup>先生に弟子入りした。ピアニストになるつもりだった。

◆豊増昇は、東京音楽学校（現・東京芸大）卒業後、ドイツに留学。帰国後は東京音楽学校教授を務めた。

園田高弘、館野泉の師でもある。小澤征爾が弟子入りした頃、バッハの全曲演奏を始めたばかりだった。

……金田村から通学するのが大変なので、成城の酒井公先生のお宅、その後は成城の教会の平出牧師の厚意で二階にも一時下宿し、礼拝でオルガンを弾く代わりにただで住まわせてもらっていた。この頃の小澤一家は、まだ金田村に住んでいたことになる。

……昭和二十五年（一九五〇年）、中学三年になる直前、ラグビーの試合で両手の人さし指を骨折した。豊増先生に「もうピアノは弾けなくなりました」と言うと、「音楽はやめるのか」。黙っていたら先生が「指揮者と言うのがあるよ」。初めて聞く職業だった。指揮者もオーケストラも見た事がなかった。

おふくろが「うちの親戚に指揮者がいるよ」と教えてくれた。おふくろの亡くなった伯母・おとらさんの息子がチェロ弾きで、指揮もやるという。名前を斎藤秀雄と聞いた。おふくろに書いてもらった手紙を持って、一人で麹町のお宅を訪ね弟子入りを頼んだ。

◆斎藤秀雄は、戦前ドイツに留学してチェロを学んだ。帰国後、新交響楽団の首席奏者を務める一方、指揮もした。戦後は一転、教育に心血を注ぐ。東京・市ヶ谷に「子供のための音楽教室」を作り、基礎から音楽を教えていた。

……斎藤先生から「一年後に桐朋学園の音楽高校（桐朋学園女子高校の音楽科）を作るから、そこに入りなさい」と言われた。まず、成城学園の高校に進学して一年待つことにした。その間

に柴田南雄先生に作曲を、聴音を小林福子先生に習った。指揮は斎藤先生の弟子の山本直純さんに基礎を教わり、月に二度ほど斎藤先生に見てもらった。うちはその頃、金田村から引越していた。世田谷区代田の貸家に移ったものの、家賃が払えなくなつて東京農大の校舎に住み着いた。おやじの知り合いに農大の関係者がいて、空き教室を使わせてくれたからだ。

金田村については、大体このように書いてある。ミシン会社は失敗して本当に貧しかったようだ。文中、小田原弁が出て来るので、私はスラスラ読むことができた。「行くもんだから(行くので)」「うんと(たくさん)課題があつて」「成城の学費を滞納するのもしょっちゅう(いつも)」など。小沢さんは、話す時も早口の小田原弁です。感受性が強い子ども時代に学習した事は、意識しても、なかなか直すことができない。私も小田原弁を話すが、小田原弁はきれいな方言ではない。

私の家は神奈川県足柄上郡大井町金手、御殿場線の金手踏切の坂の下にあります。当時、金手の子どもたちが金田村立金田小学校に行くには、この踏切を通らないと行けない。小澤少年も毎日踏切を越えて学校に通ったことでしょう。

祖母は、「金手にも、ピアノが聞こえて来る家があつた」と言っていました。もつと詳しい事を聞いておけばよかつたと悔やまれます。小澤さんの一家が暮らしていた家のあつた場所を教えてくださいました。今は新しい家に建て替えられています。

大井町が町制施行五十周年を迎えた時、小澤さんを町に招待しました。しかし、同級生や町長

が東京上野の東京文化会館で上演中の『東京のオペラの森』の指揮を取る楽屋に会いに行つて説得しても、来ることはありませんでした。演奏会で忙しいからとか、病気の療養とか、それだけの理由ではなさそうです。

楽屋では、村祭りやバチを握つた太鼓の話題になり、「テンテコ・マツツアン」と太鼓を叩く仕草をしたそうです。小澤さんは、金手に住んでいた頃の事を鮮明に覚えていた。金手の祭りの太鼓は「テンテコ・マツツアン・テコマツツアン」と叩く。町の代表者は、今聴いたコンサートの感想を、どのように伝えたのでしょうか。

私はファンの一人として、これからも元気で活躍されることを願っています。

### オーケストラでのいじめ

オーケストラの美しい響きの中にも「いじめ」があると知り、私は驚いています。オーケストラでは、譜面台が二人に一台です。一冊のスコアを二人で共有する。多数の演奏者が一台ずつ譜面台を使つたら、ステージが今の二倍の広さがないといけません。当然だが、譜面は左側に座つた人がめぐる。先頭の右側にいるコンサートマスターは譜めくりをしない。

神奈川新聞の『わが人生』の著者・ヴァイオリニストの小林武史さんによると、「東京交響楽団のコンサートマスターをしていた時、隣の席で譜をめぐってくれた七沢八郎さん（若くして癌で逝去）は、とても協力的で、心配りしてくれるので、コンサートマスターとしての演奏に大変助かった。後に他のオーケストラへ行つて、わざとめくりを遅くされたり、早くされたり、痛

い目に遭わされたことが何度かあった。その点、七沢さんの譜めくりの技術はとても素晴らしく、先に跳ぶ箇所などは、さっと弓で示してくれるし、危なくなると周りに分からないように助けてくれました」。

美しい交響曲を奏でている人が、「譜めくりを、わざと遅くしたり、早くしたりしている」とは、信じがたい「いじめ」です。

モーツアルトを聴くことを趣味としている夫に話すと、「譜面台は二人に一つなのですか。知りませんでした」「左側の人が譜めくりをするのですか。知りませんでした」と、次元の低い事を言った。オーケストラに参加した事のない人は、知らなくて当然かもしれません。

## 伴奏の力

伴奏の力は大きい。

### 「三浦洋一」の伴奏

ソプラノ歌手の伊藤京子、ピアノ伴奏は三浦洋一。この二人の演奏は、たくさんのレコード、テープ、CDとして残っている。歌声とピアノ伴奏が溶け合い一つとなって聴く人を魅了する。日本では、とかくピアノは、伴奏として片づけられ注目されない、軽んじられる傾向にある。しかし、同じ力がないと歌は立ち行かない。伴奏者に力が無く、ヨロヨロした演奏では、いくら

歌手が頑張っても、すばらしい演奏は完成しない。

◆三浦洋一は、NHKテレビの子ども番組『うたのえほん』や『おかあさんといっしょ』で、小林道夫と共に活躍したピアニスト。伴奏専門のピアニストとして東京放送合唱団、二期会合唱団、日本女声合唱団、慶應義塾ワグネル・ソサエティー男声合唱団、コールメグほか数多くのプロ・アマ合唱団や、伊藤京子、中沢桂、中村健、立川清登などの声楽科のリサイタル、レコーディングで活躍した。また彼は伴奏専門ではあったものの、昭和六十三年（一九八八年）にソロで、瀧廉太郎没後九十周年記念企画の一環で、瀧の作曲したピアノ曲、「メヌエット」と「憾」を、世界で初めてCDにレコーディングした。

ある日、三浦洋一のファンが「ご自分のリサイタルはなさらないのですか？」と聞いたところ、「ボクは伴奏という演奏スタイルがこの上なく好きなんです」と答えたという。桐朋学園、名古屋音楽大学の教授を勤めた。シャイな人で、演奏が終わるとピアノの影でお辞儀をし、すぐ退場して常に目立たなかった。平成二十一年（二〇〇九年）一月二十二日、胃癌のために亡くなった。享年七十五歳でした。

伊藤京子の日本歌曲での足跡は大きい。オペラでも容姿や演技力を生かしたヒロイン役で、一期の二期会を支えた。オペラ『夕鶴』（作曲・團伊玖磨）を覚えている人は多い事でしょう。私が国立音楽大学の学生だった時、伊藤京子先生は教授だった。声楽の試験の試験官を務めた時があり、男子学生が大喜びをしていたのを覚えている。私たちの憧れであり誇りだった。現在（平成二十四年）、国立音楽大学名誉教授。



## 「リッター」の伴奏

フルート奏者のピエール・ランパルも、優れたピアニストのジョン・ステイール・リッターと組んで活躍した。リッターは、ピアノを弾きながら、ピストルの効果音を入れたりして、自分でもステージを楽しんでいた。余裕があった。秦野市文化会館大ホールでの演奏会に行った私の子どもたちは、手をたたいて大喜びだった。口々に「ピアノの人がすごかったね」と言った。事実、この時のランパルは年老いて元気がなかった。フルートの演奏も聴衆に感動を与えることなく終わった。かつてのキレのある演奏ではなかった。これを最後に日本公演は終了した。その後、ランパルは平成十二年（二〇〇〇年）五月二十日に亡くなった。享年七十八歳でした。

今日、CDで若きランパルとリッターの演奏を聴くと、美しいフルートの音色、そしてピアノの響き、本当に素晴らしい。

## 自己エコー

仙台市には、伊達政宗が築いた青葉城がある。星間船一が青葉城をテーマにした詩を作り、仙台NHKのFM放送に投稿した。番組を担当していたシンガーソングライターのも、さとう宗幸が作曲し『青葉城恋唄』を放送した所、大きな反響があった。キングからレコードが発売され、さとう宗幸は、昭和五十三年（一九七八年）のレコード大賞新人賞に選ばれた。この歌の二番には仙台的七夕、三番は青葉通りが読み込まれている。



インターネットのYouTubeで、さとう宗幸が歌う『青葉城恋唄』を聴いた。そして、ある事に気がついた。若い頃、長い黒い髪にギターを抱えて歌う、さとう宗幸は、甘いマスクで甘い声、そしてビブラートがない。ところが、年代が進むにつれて、次第にビブラートが増えていく。つまり、年を取って声が出なくなっただけで、ビブラートをかけないと歌えなくなっただとわかった。童謡の会の会員は、『青葉城恋唄』Ⅱ「若い頃のハンサムで甘い声の、さとう宗幸」を覚えているのだ。さとう宗幸は、昭和二十四年（一九四九年）一月二十五日生まれ、現在・満六十三歳。「なるほどそうだったか」。

YouTubeは、音が悪いが、いろいろな人の歌が即座に聴けるという利点がある。若きダークダックスも『青葉城恋唄』を歌っていた。セカンドテナーの愛称マンガさんこと佐々木行が「♪ひろせがわー ながれるきしべー おもいではー かえらずー」と歌った。ビブラートは、ない。懐かしい声だ。現在、マンガさんは病気療養中。歌手のさとう宗幸とは、はとこ（さとうの祖母と佐々木の祖母が姉妹）。そして愛称バクさんこと高見澤宏が、平成二十三年（二〇一一年）一月七日に心不全のため七十七歳で急逝すると、ダークダックスは平成二十三年に解散した。もう、ダークダックスの歌声を聴くことはできない。

次に倍賞千恵子が歌う『青葉城恋唄』を聴いた。素直な優しい歌声が部屋中に響いた。ビブラートは、ない。そして、石川さゆりの歌を聴いた。演歌調の『青葉城恋唄』は、なかなかいい。もちろんビブラートは、ない。「♪ときはーめぐりー またなつがきてー」から声を強めてうなった。「さゆり節」だ。私は石川さゆりが歌うCDを買って、童謡の会員に聴かせたいと思った。この

歌は、石川さゆりが歌うのが一番いい。

## イランの正月

「サーレ ノウ モバラク・新年おめでとう」。イラン大使館で行われたコンサートに行った。イラン大使館は東京都港区南麻布にある。次女が秘書をしていたことがあるので招待された。イランの暦は三月二十日の春分の日から始まる。今日、平成二十四年三月二十二日は正月です。それで、本国からお祝いの演奏のために楽団が来たというわけです。

演奏者は七人で、歌手が一人、縦笛が一人、弦楽器が二人、「ピアノのお父さん」という説明のメロディー楽器が一人（金属製のバチで敲いて音を出す）、打楽器が二人。どれも日本に無い初めて見る民族楽器ばかりです。民族衣装で演奏したり歌ったりした。私は、踊りもあるといいのになあと考えた。歌は、イランの国やアツラーの神を讃える歌です。強いリズムの部分、訴える部分が来ると、歌も大声となり迫力があつた。一人一人がプロの演奏家で、すばらしかった。男の人ばかりのオヤジ楽団。娘の説明によると、「音楽学校はあるが、革命後は西洋音楽が禁止された。彼らがどこでどのように演奏技術を習得したか不明」との事でした。最後に手拍子で会場と演奏が一体となった。私は、日本の曲を一曲演奏してほしかったと思った。後で、よく考えたと日本の曲を演奏するはずがなかったのだが、その場では、そう思った。来日する音楽家は、普通、アンコールで日本の歌を演奏する。

司会のイラン人が流暢な日本語で、面白い事を言った。「僕の日本に対するイメージは、映画の黒沢明の『七人の侍』だった。日本の飛行場に降り立ってサムライを捜したが、いなかった。逆に、日本人はイランに対して誤解をしていると思いますね。弾丸が飛び交っている、とかですね」。日本人のイランのイメージは、その通りです。

スカーフをかぶった女性がコーランを朗読した。コーランは、イスラーム教の聖典だ。司会者が、「今、彼女が読み上げたのが、お祈りの言葉です。イランでは、一日に五回もお祈りをします。私もします。この中の人で、ペルシャ語が、できない人はいますか？」と聞いた。私と夫が手をあげた。一列目は私たちの他に二人の若い女の子が手をあげただけだった。みんなペルシャ語がわかる人たちだった。大学でペルシャ語やイスラームの研究をしている人も来ているようだった。日本人の男性が、ペルシャ語でお祝いの挨拶をした。もちろん、私には、まるでわからなかった。司会者は一生懸命で、なかなか好かった。私は持参した『読む、歌う 童謡・唱歌の歌詞』（夢工房）を、この司会者に渡して、「演奏、すばらしかったです。演奏者に日本の歌の本をプレゼントします。でも、五冊しか持って来なくて、すみません」と言った。そして、「これが私の名前です。このページに『さくらさくら』があります。私は小田原から来ました。小田原わかりますか」。すると「池田さんですか。ありがとうございます。小田原は知っています。おお、遠くから、ありがとうございます。箱根のプリンスホテル、温泉に行った時、小田原を通りました」と、また驚くことを言った。「池田」という漢字が即座に読めた事に私は驚いた。長く日本に滞在しているのでしょ。日本が大好きなようです。その事が手に取るようにわかりました。

そして、演奏者に本を配ってくれた。演奏者のリーダーの人が、お礼にCDをくれた。握手をした。CDは、その楽団の演奏録音で、日本では売っていないものでした。私は粹なはからいに感動した。

縦笛の奏者の人が、私の所に来て、本を開いて「トラララー、ラララー」と歌い出した。私も「♪さくらー、さくらー」と歌った。「音譜、すぐ読めるね」と言うと、夫が「あたりまえだ」と言った。私は、歌の本に『さくらさくら』の楽譜を入れておいてよかったと思った。楽譜は世界共通語です。そして、『さくらさくら』は日本が誇る名曲です。私は、とても気に入っている。

娘が上司のイラン大使を紹介してくれた。娘は英語がペラペラだった。私は、日本語で、「演奏会、すばらしかったです。娘が、お世話になり、ありがとうございます」と、お礼を言った。大使の方は、日本語が全くできなかった。

歌手の人が、立食コーナーにいたので、「コンサートよかったです。感動しました。今度、『さくらさくら』を歌ってください」と言った。娘が英語で通訳してくれた。握手をして別れた。体格のいい、氣のいいオジサンだった。

私の一家は宗教を持っていない。世の中にはいろいろな宗教があり信仰は自由だ。でも特別な宗教を持つていたら、こんなに素晴らしい楽団の演奏を聴いて楽しむ事ができない。イラン大使館に入ることもできないでしょう。当然、握手して笑い合い、友好を育む事もない。それは、おかしいのではないか。今日のすばらしいコンサートを、大勢の日本人に聴いてほしかった。一緒に楽しみたかった。私は民族音楽が、ますます好きになった。

## 恐いカニ伝説

夫が、おもしろい事を言った。「昔話の浦島太郎は、竜宮城へ行く時は、助けたカメに乗って行った。しかし、帰って来たたら、そこには恐いカニがいたんだ」「なにそれ?」「歌そのままだよ。僕が歌ってあげましょう」。

夫は手拍子をしながら『浦島太郎』を歌った。「♪むかしー むかしー うらしま はー」と、全部「タツカ タツカ」のリズムで気分よく歌った。そして四番になった。「♪帰って見れば、恐(こわ)いカニ」と歌った。私は、ひっくり返って笑った。「どこで、こんなに面白い事を仕入れて来たの?」と言ってから、また、ひとしきり笑い転げた。

二階に上がって、一人になって小さい声で歌ってみた。「♪むかしー むかしー うらしま はー」、正しくは「タツカタン タツカタン タタタツカ ターアン」のリズムだ。そして四番、私も「♪帰って見れば、恐(こわ)いカニ」と歌った。畳をたたいて笑った。腹が、よじれるほど笑った。『新訂 尋常小学唱歌』第二学年用(文部省)に書いてある歌詞は、「♪帰って見れば、こは如何(いか)に」だ。

しばらくして、もう一度「どこで、こんなに面白い事を仕入れて来たの?」と夫に聞いたが、それを言いながらも笑った。

「昔の子どもたちは、浦島太郎が竜宮城から帰ってきたら、恐いカニが待ちかまえていたと思っ込んで歌っていたのさ。普通の事だよ。知らなかったの? 今度、童謡の会でも歌ってごらんよ」

「いやよ、私が一番最初に転げまわって笑ってしまいわ。笑わずには歌えないわ。それに、タツカッタカのリズムで全員が歌ったら、直しようがない」「いいじゃないの、それが歌い継ぐということでしょう」。

「童謡の会で『金太郎』を歌って、『浦島太郎』と『桃太郎』を歌わないのは片手落ちですね」「でも、昔、『桃太郎』は日教組が歌わせるのを反対した曲よ。歌詞に問題があるわ」「そんなこと、みんなで歌えば怖くない。きつとみんな大喜びするよ。♪もーもたろさん ももたろさん。ほら、元気が出るでしょう。なかなかいい」。

私は、また二階に上がって、今度は頭をかかえて考え込んでしまった。『浦島太郎』と『桃太郎』は、どのようにあつかったらいいのだろう。困ったな。

## 奇妙な名前

童謡『赤ちゃんのお耳』の作詞者は、都築益世（つづきますよ）、作曲は佐々木すぐる。

「（つづきますよ）だなんて、これは絶対に本名じゃないね」と夫が言い出した。今まで思ってもみなかった事だ。言われてみれば、（つづきますよ）とは奇妙な名前だ。

「調べてみても、（都築益世）はペンネームと書いてある物がない。本名と書いてあるものもない。やはり、これは本名で、ペンネームとしても使っていたのだと思うわ」。

略歴によると、文学者仲間では親分肌の親切な人柄により、いつもグループの中心的存在に



なり、昭和三十二年には、ラジオ、テレビ、レコードの略称を誌名とした『ら・て・れ』を創刊。都築の行く所、どこにも笑いあり、にぎやかな雰囲気を身につけた人だったようだ。

「ほら、みんな、だまされていたのさ。都築益世が創刊した同人雑誌や、創作した童話・童謡が（つづきますよ）とは、なかなかいいじゃないですか。しかし、小児科医院を開業していたのなら、医者の名前が（つづきますよ）ではいけない。病気が（つづきますよ）では、患者が来ない。これは絶対にペンネームであって、本名ではないね。医者をする時は、本名の都築〇〇だったと思うよ」。

「そうかなあ、父親の代から医者で、父親もハイカラな趣味人で、そこに男の子が生まれました。何をしようが自由だが、この医院だけは（続きますように）という願いを込めて（つづきますよ 都築益世）にしたのだと思うわ」「よくそんなでたらめがすらすら出るね」。

たとえば、唱歌『旅愁』の作詞者、犬童球溪いんどうきゅうけいの本名は信藏のぶぞう。「犬童」は熊本県に多くある名字で筆名の「球溪」は郷土の球磨川渓谷にちなんだものです。

「都築益世について、どうやったら調べられるかしら?」「インターネットで東京都杉並区荻窪の病院を検索すると東京都杉並区荻窪に『都筑外科・形成外科医院』があるよ。問い合わせたらどうですか。今訊いておかないと、うやむやになってしまいますよ」と夫が言った。

この一言で、スイッチが入り、手紙を書いた。メールより手紙の方が、誠実と思ったから。ところが、荻窪の病院に連絡をしてみると、全く違っていました。そもそも病院は「都筑」で「都築」ではありません。私は慌てました。返信メールには、「このあたり都筑という姓は割と多いですが、

みな都筑であつて都築はまれです」と書いてありました。都筑医院の都筑先生には、私の早とちりで、お忙しいのに御迷惑をかけてしまいました。お詫びをしました。

元コロムビアレコード会社のディレクター足羽章さんは、日本童謡協会編 季刊『どうよう』第9号(チャイルド本社)の(私の制作した童謡 童謡制作の想い出「赤ちゃんのお耳」)で、「作者は東京都杉並区荻窪の都築益世さんという小児科のお医者さんでした」と書いている。足羽章さんが書いたものは、間違いが多い。

## みんなが歌う

子どもも大人も歌う。歌は心を楽しくしてくれれます。美しくしてくれれます。慰めてくれれます。

### 軍歌を歌う

佐佐木信綱は、『水師営の会見』『勇敢なる水兵』の作詞者です。小山作之助は、『敵は幾万』『川中島』の作曲で有名です。

童謡や唱歌を歌う会では、『夏は来ぬ』の解説をした後、指導者がこれらの軍歌を歌い出すことがあります。私は驚きます。横浜の歌う会では、みんなで『夏は来ぬ』を歌いました。指導者の解説に『水師営の会見』がありました。客席の高齢の男性が手をあげて立ち上がり、「先生、歌ってください。歌えないのなら私が代わりに歌いましょうか」と声をかけた。「それは(あなたに歌つ

でもらわなくて) いいですよ。でもね」一瞬考えて、「じゃあ歌います」と言って、指導者は歌い出した。楽譜にしがみついて歌った。この歌は七番までである。最後まで、なんとかたどり着いた。会場は割れんばかりの拍手だった。私は会場を見渡して、あきれた。

玉川学園のチャペルで行われている歌う会でも、みんなで『夏は来ぬ』を歌った。その後、指導者が「みなさんは知らないかもしれませんが、『敵は幾万』という歌も小山作之助が作曲をしているんですよ。これから僕が歌ってみますね。聞いてみてくださいね。うまく歌えるでしょうか」と言って歌った。会場は、「うまい」「いい声だ」「さすがだ」などと感動の渦だった。私は、入口に立っていた係りの若い男性に「教会で軍歌を歌うのは、やめていただきたい」と抗議した。男性は、「なんのここと？」という顔をしただけだった。

軍歌は、戦後は学校で歌う事がさしとめられました。歌って楽しい歌ではありません。軍歌を歌う指導者の質が問われます。

### 子どもが歌う

今、「子どもが童謡を歌わなくなつた」と嘆く人がいるが、子どもは歌っている。昔、日本の童謡歌手第一号の本居みどりが歌う『十五夜お月さん』を吹き込んだ株式会社日本蓄音器商會のニッポノホンは、レコードの宣伝に「子供は小鳥と同じやうに本能的に歌を謡はないではゐられない人間です」というキャッチコピーを『金の船』に掲載している。

## 「チューリップ」を歌う

小さな女の子と父親にチューリップが咲く公園で出会った。女の子が突然歌を歌い出した。

「♪咲いた 咲いた チューリップの花が」。春の光りの中に、かわいい声が響いた。それは天使の声のようだった。残念な事に父親も草むしりのおばさんも、気がつきませんでした。父親は「手を洗おう」と言い、草むしりのおばさんは「こんな格好でやっているのよ」と、通りがかりの人と雑談をしていた。二人共かわいい歌声を聞き逃し、「もったいない」事をしました。

## 「うさぎとかめ」を歌う

酒匂川の橋の上を西日を背にして小学生の女の子が歌いながら来る。「♪もしもし かめよ かめさんよ」。高い声が楽しく夕空に響く。女の子に手を引かれたおじいさんは、笑みを湛えて本当に嬉しそうだ。背中のリュックから釣竿が出ている。橋の向こうの釣堀に孫と一緒に来たのでしよう。たくさん遊んだ帰りです。自転車に乗った私と目が合うと、おじいさんは、ますます嬉しそうな顔をした。私も、嬉しくて笑い返した。

昔は、このような場面では、近所のおばさんやおばあさんが、「賢い子だね」とか、「上手だね」「偉いもんだ」「孫に引かれて善光寺参りで、いいね」などと言葉をかけたものです。私は、とっさに言葉が出なかった。

## 「とんぼのめがね」を歌う

赤いランドセルを背負った女の子が歌いながら帰宅する。「何の歌かな？」耳をすますと、「♪とーんだからー」が聞こえた。『とんぼのめがね』だ。いい気分で「らー」を夕方の空に向かっ

て響かせた。この歌は、二年生の音楽教科書に掲載されている。今日学校で習った歌を歌いながら帰宅する子どもがいます。先生に聞かせてあげたいと思いました。高くて澄んだ声でした。

『とんぼのめがね』は、昭和二十四年八月二十二日にNHKラジオ第一の『歌のおけいこ』という子ども向けの番組で水上房子が歌ったのが最初です。

NHK昼のクイズ番組『連続クイズ ホールドオン』が人気です。今日、平成二十四年八月二十二日は夏休み親子スペシャル。最初に歌われた八月二十二日と同じ記念すべき日です。見ていると、『とんぼのめがね』に関する問題が取り挙げられました。私は、嬉しいなあと思いました。〔問題〕「童謡『とんぼのめがね』の二番で、「♪とんぼのめがねは、ぴかぴかめがね」と歌われますが、さて、何を見ていたからでしょうか、お答えください」という問題でした。

解答者のお母さんが口をモゾモゾさせて頭の中で歌ってから「空」と答えました。司会者が「残念、おてんとさま（太陽）が正解です」と言いました。お母さんが頭の中でとつさに歌ったのは一番でした。男の子は、黙っていました。「この歌、君も知っているでしょうか？」。

ところで、NHKラジオ第一で放送された記録は、朝日新聞番組表などで確認できますが、年月日までが公表してあるのはインターネット検索『池田小百合なっとく童謡・唱歌』と、池田小百合編著『読む、歌う 童謡・唱歌の歌詞』（夢工房）だけです。問題を作った人は、私のウェブページを見て勉強をしたのでしょうか。

「おおきな くりの きの したで」を歌う

保育園で、幼稚園で『おおきな くりの きの したで』を歌って踊る。簡単に覚えられて楽

しい曲だ。小学一年生の教科書にも掲載されている。タイトルは一年生でも読めるように平仮名で書かれている。

「毎朝、五時半少し前にラジオで童謡が流れます。今朝は『おおきな くりの きの したで』でした。二番は「リンゴの木」三番は「柿の木」と三番まであるのですね。知らなかったです」と言う童謡の会員があった。この人には小さな孫がいる。ラジオ放送を聴いた後、さっそく一緒に歌って踊ったに違いない。

私が小さい頃は、そのままの歌詞で歌って踊った。短いのですぐに終わってしまい、先生に繰り返しやらされたのを覚えている。困った先生は、かえ歌の工夫をするという柔軟な考えがなかった。

娘たちが小さかった頃は、「栗の木」を「杉の木」や「松の木」に置きかえていた。今は、「リングの木」や「柿の木」なのでしょう。この歌は、二番、三番ということなく子どもたちの身近にある適当な物に置きかえて遊ぶことができる遊戯歌です。

### 「あわてんぼうの サンタクロース」を歌う

童謡や唱歌を歌う会で一番困るのは、「クリスマス」です。当然だが、歌う歌が無い。しかし、嬉しい事に日本人が作った『あわてんぼうの サンタクロース』（作詞：吉岡治 作曲：小林亜星）がある。子どもたちが大好きな歌です。

娘たちが小学生の時、子供会でクリスマス会があり、六年生の親が準備を手伝った。まず、クリスマス之歌を歌う事になり『あわてんぼうの サンタクロース』を歌った。周りで見ていた親

たちは、口々に「知らないわ」「この歌、知ってる？」と言っていた。五番までいく内には覚えて歌うだろうと思ったが、親は、だれも歌わなかった。一方、子どもたちは体を揺すってリズムに乗って楽しそうに歌った。それを見た私は涙が出るほど感動した。その後、なぞなぞやゲームをして遊び、用意されたプレゼントが配られ、みんなでケーキとミカンを食べた。娘たちは、このような行事には積極的に参加していたが、全く参加しない子もあり気になった。二十年も前の事だが、歌を歌うと、このささやかなクリスマス会の思い出が蘇えって来る。

クリスマスは子どもたちにとって楽しい行事です。『あわてんぼうのサンタクロース』を親子で歌えば、いつそう楽しいクリスマス会になるでしょう。日本には、こんなに素敵なおクリスマスソングがある。残念な事に、文化庁編『親子で歌いつこう日本の歌百選』（東京書籍）には掲載されていません。

### 「俳優」が歌う

DVD「吉永小百合が選ぶ映画ベスト20」に橋幸夫主演の映画『いつでも夢を』が選ばれていた。橋幸夫も浜田光夫も吉永小百合も歌う。浜田光夫も吉永小百合も下手ではないが、プロ歌手のようなうまさがない。なぜだろう。

深夜、NHK『今夜も生でさだまさし』を観た。さだまさしは、風邪ぎみで、ゲンゲン咳をしながら葉書を読んだ。ペットボトルの水を、しきりに飲んだ。最後に持ち歌の『精霊流し』を歌った。スタジオは水を打ったように静か。みんなが聞き入った。声がすばらしくいいわけではない

のに聞かせた。今、咳をしていた人と思えない歌唱力だった。プロの底力なのでしょいか。

歌手と俳優の歌の違いは何だろう。俳優は「台詞」として歌をあつかっているのか？ 歌は演技なのか？

俳優の吉田鋼太郎が言った。「僕はミュージカルで歌を歌う。舞台を観に来る客は、歌を聴きに来ているのか、劇を観に来ているのかと考えながら演じている」と。吉田鋼太郎はNHK朝の連続ドラマ『花子とアン』で白蓮の夫・炭鉱王の役で好評だった。

演歌歌手の北島三郎が言った。「僕たちが歌っているのは流行歌なんです。歌は流れて行くんです。好い曲が残って行く」と。これは名言です。『函館の女』は名曲です。

### 「武満徹」を歌う

平成二十七年（二〇一五年）六月六日（土曜日）、Eテレ「ららクラシック」で武満徹作曲の『うたうだけ』と『翼』を聴いた。東京混声合唱団の合唱、指揮者は山田和樹。

武満徹は、一九六七年『ノヴェンバー・ステップス』の発表で、世界にその名をとどろかせた。人生の後半、一九八〇年代に入って美しく親しみやすい合唱曲を数多く発表している。メロディーはシンプルで美しいが、ハーモニーを作り上げている音は武満らしく複雑に絡み合っていて歌うのは容易ではないという。合唱団の歌声に期待して聴いた。

特徴としては、メロディー以外のパートが、極めて細かい音を歌いながらもメロディーと分離することなく、独特のハーモニーを作り上げていること。番組の中で、指揮者の山田和樹氏は、



「ピアノで弾いた場合は音がぶつかりあって、うまく響かないのではと思うが、人の声だと不思議と美しい響きになる。武満さんはそこまでイメージしてらしたんだと思う」と発言している。

しかし、その期待はすぐに裏切られた。合唱は暗く重く響いた。なぜだろうか？ 真剣に聴いた。ソプラノが原因だった。天使の声のようにしたかったソプラノにメゾソプラノやアルトの人がいて邪魔をしていた。ソプラノを少なくして音をそろえないと武満徹の意図する音にはならない。声の響きをそろえるのは、指揮者の耳にかかっている。一般の合唱団にもメロディーを歌いたい、メロディーしか歌えない、そのために、メゾソプラノやアルトの声の人がソプラノのパートにいる場合がある。指揮者がどんなに困り果てているか、わかっていない。時として、指揮者の方が合唱団を投げ出す場合もある。

現代音楽の分野で世界的に活躍した作曲家の武満徹。彼が音楽の道を志す原点は、戦争中に聞いた一曲の「うた」だった。武満は、中学二年生の時に埼玉県に疎開、そこで終戦まで食料基地造りなどの重労働に従事していた。ある日、一人の学生出身の兵士が、レコードを聴かせてくれた。その曲はシャンソンの名曲『聞かせてよ 愛の言葉を』だった。武満は、当時は歌詞の意味もわからなかったが、その美しい「うた」に心の底から感動を受け、「もし、戦争が終わったら、僕は音楽家になりたい」と決意したという。その決意どおり、戦後ほぼ独学で作曲を学び、世界的な作曲家「タケミツ」へと上り詰めて行った。まさに、人生を決めた「うた」との出会いだった。後日、有名になった武満徹の所に、「レコードを聴かせたのは僕です」と名乗り出た人がいたという。感動の話だが、本当だろうか。

## 歌は好きですか

私の童謡を歌う会は、なぜ二十五年も続いているのでしょうか。ラジオやテレビ、テープやCDを聴いて、家で歌って楽しむ事ができるので、みなさんが公民館に歌いに出かけて来るのが不思議です。

### ピアノに合わせて歌う

童謡の会の最年長者は、大正四年生まれです。現在（平成二十七年九月）、満百歳です。私は、この会員から見れば子どものようなものです。

「童謡と唱歌、大好きです。ピアノに合わせて歌う事の幸福を、ありがとうございます」と言って毎回一番に会場に来られます。

戦時中は、足踏みオルガンでした。ピアノが各学校に設置されたのは戦後の事です。高度成長期には、家庭にも一家に一台ピアノが普及し、どこの家からもピアノの音が聴こえました。ピアノブームでした。ピアノは練習をすれば、それなりに弾いて楽しむ事ができますが、いったん練習を休むと弾けなくなります。競い合って買った高価なピアノも、次第にあきらまれ、物を置く場所になり、放置されています。世の中が、めまぐるしく過ぎて行く今日では、子どもたちが落ち着いてピアノを弾く事は無くなり、大人も音楽を楽しむ心のゆとりを失っています。

### 懐かしく歌う

童謡の会は、ほとんど女性の会員です。時々男性の人も来ますが、女性陣に圧倒されて長続きしません。私の解説や話が入らないと、からんで来る人もありますが、みんなから、ひんしゅくを買って退会してしまいます。

唯一長く歌いに来ている男性会員が一人おられます。いつも、おだやかで、ニコニコされていて、女性会員に人気です。はつきりした年齢は、わかりません。

「童謡と唱歌は、いつ聞いても気持ちがあらぎます。私たちが小学生の頃は、唱歌の時間があまりありませんでした。歌うと自分の子どもの頃が懐かしく思えてなりません」と言って歌いに来てくださっています。

戦時中は、歌と言えば軍歌でした。西洋音楽は軟弱とされ、学校の唱歌の時間は国の方針にのっとったもの『広瀬中佐』や『戦友』などを歌わされました。『朧月夜』や『海』などの歌は、日本の国土の美しさを教えるために歌わせていました。

今、童謡や唱歌を歌うと、子どもの頃の事が次々思い出されるのでしょうか。楽しかったことも、つらかったことも。歌を懐かしく歌える平和な時代を共に喜びたいものです。

### 声が出るように歌う

童謡の会には、一人で暮している人が大勢来ています。一人暮らしをしていると、一日中だれとも話しません。時には一週間も、十日も話さない事がある。

「ラジオから流れる歌を聴いて楽しいなあと感謝の毎日でした。歌が好きなのに、最近では声が出なくなりました。童謡の会に入ったので、楽しく歌えるようになると思います」。

高齢になり、娘の家で世話になっていている人も大勢います。自己紹介の時、「今度、娘の所に世話になるために東京から来ました。みなさんのお仲間に入れていただき嬉しいです。どうぞよろしく」と挨拶すると、会場から「やっぱり娘の所が一番いいわよね。幸せよね」と言うささやきが、あちらからも、こちらからも聞こえます。

声も年を取ると老けます。しかし、ずっと歌っていると歌は歌えるようになるものです。声が出るようになるのです。私は小さい頃、歌を歌うと、すぐ喉が痛くなり風邪をひいた状態になったのですが、現在では、童謡の会で歌い続けても、まだまだ歌えます。いくらでも歌っています。みなさん長く歌いに来てほしいと願っています。一緒に歌って楽しく生きて行きましょう。

### 知らない歌を覚えたい

「知らないので覚えたいと思ひまして、『春が呼んでるよ』をリクエストします」と言われる会員があります。熱心です。

『春が呼んでるよ』は、「NHKみんなのうた」で昭和三十八年二月・三月の歌として、友竹正則、東京放送児童合唱団、東京混声合唱団の歌で放送になりました。この放送は、次第に忘れられ、歌も歌われなくなりました。とても素敵な清々しい歌です。「NHKみんなのうた」は、このような歌をもっと紹介してほしいと思います。みんなに、特に子どもたちに好い歌を提供して

ほしいと願っています。

「童謡は全部好きです。新しい歌も教えていただき、感謝しています」と言う会員もいます。私の童謡の会では、新しい歌も紹介しています。

知らない歌、新しい歌も覚えて、歌えるレパートリーを広げると、これからの人生が、もっと楽しくなるでしょう。

### みんなで歌うのは楽しい

「童謡の会がある日は、先生をはじめ皆様の顔を拝見できるかと思うと朝からソワソワ、心はワクワクです。楽しいひと時を、ありがとございます。歌った後の満足感は、心を豊かにしてくれます」「この会は私の何よりの楽しみです。大きな声で歌うのは、楽しいです」「いつも楽しく歌わせていただいております」「楽しみに続けたいと思います」「まだまだ歌いたい歌が沢山あります。リクエストしますので、よろしく願います」「家でも歌いますが、一人より大勢の方が楽しいです。元気をもらっています」中には「歌える事の幸せをかみしめながら今年も全回出席をめざします」と頑張る会員もおられます。

「知っている歌を次々歌う。新しい歌を覚える。先生が研究された事を教えていただき感動する。そして今日出席できた事の幸福をかみしめながら帰宅する。帰りはいつもルンルン気分です」。

主宰者の私は、童謡の会に来て、楽しく歌って大喜びで帰る会員を見て、「うれしいなあ、よかった」と思います。「次回は、もっと楽しくやろう。もっと頑張ろう」と励みになっています。

### 幼い頃を思い出して歌う

「童謡を歌っていると幼い頃が思い出されます。いつまでも歌い続けて行きたい」「学校帰りに友だちと一緒に『春の唄』を歌いながら帰りました。♪櫻の花の咲く頃は うららうららと日はうらら」「『叱られて』は、五歳違いの妹を負ぶって歌っていました」「『さくら さくら』や『ウグイス』は、小学生の時、学芸会で歌った懐かしい歌です」。みんなで歌うと思いが蘇えます。

### 話を聞く楽しみ

「童謡の会では、毎回楽しいお話を聞き元気をいただきます」「楽しく歌わせていただきます。ありがとうございます。先生のお話も楽しみです」と言われる事がある。どうやら、歌を歌うだけでなく、私の歌の解説や世間話も楽しみに来てくださっているようです。話す内容にも責任があります。

### 帰ってからも歌う

「この頃、鼻歌で童謡を歌っています」「何か嫌な事があるたびに童謡を口ずさみ、こんなにも童謡が心の支えになってくれていると実感しています」「嬉しかったのは、孫娘と童謡を一緒に歌えた事です」「犬の散歩をしながら、主人も歌い出したんですよ」「朝、夫がりひよこがね お庭で ぴよこぴよこ かくれんぼと、『かわいい かくれんぼ』を歌いながら起きて来ました」。童謡の会員は、家に帰ってから歌っているようです。本当に歌が好きなたちです。

さらに、「今年も楽しみにしています。先生どうぞ、お身体ご自愛下さい」と、私の健康を気づかつ

てくださる会員もあります。私は「ご自愛下さい」と言う言葉にしびれます。

### 暗唱する

「好きな歌を空で歌えるように暗記をしています。一つ覚えるのに時間がかかりますが、少しずつレパートリーが増えました。買い物や散歩の途中に口ずさんでいます。呆け防止にもいいかと思えます」と言う人もいます。

### お母さんは童謡

「息子が『お母さんは童謡だね』と言ってくれました」と嬉しそうに話される人があった。「やさしい親思いの息子さんだなあ」と思いました。息子が家に寄りつかないと嘆く親が多い中、このような会話がある事は珍しいです。この人は、私の童謡の会の最初からの会員です。童謡が好きでたまらないというのが、会話をするたびに伝わって来ます。美しく穏やかで上品な物腰なので、会員仲間では憧れの存在です。女優の八千草薫さんのような人です。

### 音痴でも歌う

私は神奈川県西部地域の五つの会場で童謡の会を展開している。どの会場にも二、三人は音痴の人がいる。共通している事がある。歌うのが大好きで、熱心。そして人柄が好い。音を外しながらも大声で気分よく歌うのを見ていると、私もつられて外す。

ある時、低く移調した楽譜を伴奏者に渡した事を忘れ、自分は高い楽譜を見て歌い出してしまった。当然、出だしの音を私だけが外した。すると、音痴の人が笑った。「音がわかる。音を知っている。間違えた音を聴き分ける事ができる」と、私は驚いた。訓練をすれば、音痴はなくなる

と確信した。

時折、先生タイプの人が、私に向かって、「違う音で歌っている方をご注意なさらない。ご指導されないのは、いかがなものか」と言って来たりする。大勢の人の前で音痴の人の特訓はできない。

もちろん文部省唱歌の『茶摘』の「♪野にも山にも」の「山にも」の音程などは、ほとんど全員が間違えるので注意する。間違った部分は、二、三回練習する。しかし、それ以上練習させられると嫌気がさす。大人だし、知っている歌だからだ。ここが悪い、あそこが悪いと指摘ばかりすると、楽しくなくなる。

歌手のアグネス・チャンが東日本大震災の被災地の福島に行った。「福島 of 皆さん、お元気ですか。一緒に歌いましょう。まず最初は、『ひなげしの花』（作詞・山上路夫 作曲・森田公一）です。大きい声で歌ってください。♪丘の上 ひなげしの花で……どうぞ皆さん声を出して。遠慮しないで」と言ったが、『ひなげしの花』を知っている若い人はいなかった。知っている中年の人は、歌詞を忘れていた。高齢者はキーが高すぎて声が出なかった。みんなが歌わないのは遠慮をしているのではなかった。アグネス自身も、無伴奏だったので音を外した。「♪はーなでー」から、どんだん外れて行った。手拍子だけが会場に響いた。プロの歌手でも時として音がわから



なくなる。自分は絶対に音痴ではないと思っっているあなた、それでは『ひなげしの花』を歌ってみてください。「どうですか、外さずに正確に歌えましたか」。

### 自治会の集いで歌う

「現代の子どもの歌は難しく、なかなか覚えられませんが、昔習った歌は、どれも何とか歌えるので楽しく童謡の会の一時間半を過ごさせていただけます。自治会の集いでも、民謡同好会の一泊旅行でも童謡の会で習った歌を歌いました」。

### 老人介護施設で歌う

ボランティアの打ち合わせに行った老人介護施設で、夕食の前に歌が聞こえて来ました。無伴奏です。祈りのように聞こえます。静かにゆったりと、歌が流れて行きます。穏やかな時が流れて行きます。清々しい歌声です。指導している人はいません。自分たちで歌っているのです。歌声は次第に大きくなり、ホール全体に響きました。私は感動しました。「ト更け行く秋の夜、旅の空の」と、明治の唱歌『旅愁』を歌っていたのでした。

### 童謡は生きがい

「童謡は、私の生きがいです」と言われる八十歳代の会員は、自分でも童謡サークルを作っています。

「八十歳の『おしゃべり会』八人は、昼食後、先生の童謡の本の中より、一回に八曲を選び歌っています。幼い頃、勉強をしたくても出来なかつた時代を過ごした私たちです。野山をポロポロの靴で駆け回り、メダカ採り、ホタル狩りなどの思い出が甦り、笑ったり目に涙したりして歌います。そんな時間が大切で、明日から、また頑張れる思いがします。みんな休むのが惜しいと出席も良く、一回でも多くと、希望と願いを込めて歌います。歌う事で元気をいただいています。ありがとうございます」。

私が勝手に「童謡を歌う会 しわくちやらず小田原」と名付けました。長い人生には、この長い名前がピッタリです。長く続くといいです。

横浜には『空の神兵』や『水色のワルツ』を作曲した高木東六が主宰していた高齢者の女声合唱団「ザ・シワクチャーズ横浜」がありました。一九八七年に発足。一時は団員約四百人にもなる人気の合唱団でした。

『空の神兵』（作詞：梅木三郎）は、「最も芸術的に優れた軍歌」と評価されたものでした。今、軍歌の特集のCDを聴くと納得できます。

『水色のワルツ』（作詞：藤浦洸）は、昭和二十五年、二葉あき子が歌って大ヒットした歌謡曲です。

高木東六は平成十八年八月二十五日、肺炎のため亡くなりました。享年百二歳でした。「ザ・シワクチャーズ横浜」は、「六十歳以上、おしゃれで歌が好きで、教養がある女性」を団員資格にしていた。

このように、私の童謡の会の会員が中心になって、自治会で、スポーツサークルで、老人介護施設で、気の合う仲間と歌っています。歌の輪が、どんどん広がって行きます。嬉しい事です。

### 「共感」と「反感」

「歌の会が、なかなかうまくいかないのですが、どうしたらいいでしょうか。先生の童謡の会を見学させていただきたい」というメールでの問い合わせが最近多い。北海道、長野、奈良、京都、岐阜、高知、東京からもあります。

「共感」と「反感」は紙一重です。童謡の会を前に進めて行く時、会員の「共感」を得る事が一番必要な事です。「反感」を持つと、会員は簡単にやめてしまいます。